●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 33

33rd Letter

裁断橋伝説

伝説そぞろ歩き

子を思う
母の思いは
永遠に
擬宝珠の向こう
若菜揺れつつ

金助への思いを擬宝珠に刻む
子を思う母の切なる愛の物語

その昔、東海道筋を東に抜けると精進川があり、その川に架かっていた木橋が裁断橋です。精進川が大正15年（1926年）、埋め立てられて、橋も自然廃止となったため、元橋の西のたもとにあった姥堂の旧地へ四柱の擬宝珠（ぎぼし）を移設しました。昭和25年（1950年）、世情により擬宝珠を取り外して臨時措置として熱田警察署に保管を依頼。昭和26年（1951年）には三分の一の大きさに縮小して、擬宝珠を取りつけて建てられましたが、現在はさらに縮小された真新しい復刻版の裁断橋が架かっています。四柱の擬宝珠は、昭和43年（1978年）7月、名古屋市文化財に指定され、現在は名古屋市博物館に保存されています。

この裁断橋にまつわるエピソードは、擬宝珠に記された銘文で広く知られています。その銘文は漢文のものが3つと平仮名のものが1つがあり、平仮名のものが最も建立の趣旨を物語っています。

銘文を原文に沿って紹介すると

「天正十八年二月十八日に　小田原への御陣　堀尾金助と申す　十八になりたる子を立たせてより　また二日とも見ざる　悲しみのあまりに　いまこの橋を架けるなり　母の身には落涙ともなり　即身成仏したまえ　逸岩世俊（いつかんせいしゅん）と　後の世のまた後まで　この書きつけを見る人は　念仏申したまえや　三十三年の供養なり」（原文はほとんど平仮名、逸岩世俊は金助の法名）

解説すると、天正（てんしょう）18年（1590年）、豊臣秀吉の小田原攻めに出陣し18歳で病死した堀尾金助の供養のために、母親が老朽化していた裁断橋の架け替えを行いました。さらに33回忌に再び架け替えを志しますが、それを果たせず亡くなります。養子が遺志を継いで元和（げんな）8年（1622年）に完成させ、その際に架橋の趣旨を四柱の擬宝珠に刻みました。その一つの平仮名書きのものが前述の銘文。橋に託した母親の子を思う心情が込められています。時を越えて人の涙を誘う切なる愛の物語です。

テティスとアキレウスの物語
母の思い叶わず息子はトロイアへ

ギリシャ神話で母と息子の物語といえば、テティスとアキレウスの話が有名です。テティスは女神でしたが、ゼウスの策略により、プティアの王・ペレウスと結婚することになりました。その結婚を祝うために、神々が天から降りてきて、テッサリアのペリオンという山の頂上で盛大な祝宴が開かれました。

二人の間に生まれたのがアキレウス。父親のペレウスも優れた勇者でしたが、アキレウスは天下に唯一無二の勇士になり、トロイア戦争で不死身の戦士として大活躍することになります。

▲ 復刻版の裁断橋。擬宝珠は市博物館に保存されている。

アキレウスが不死身になったのには理由があります。テティスがアキレウスを不死身にしようと、生まれるとすぐ冥界へと流れる川・スティクスの神聖な水に、全身を浸したからでした。しかしこの時、踵を掴んでいたため、その部分だけが普通の肉体のままで残り、そこがアキレウスの唯一の弱点となったのです。実は、この話が「アキレス腱」の語源にもなっています。

アキレウスはその後、ケイロンの元で教育され、持って生まれた素質に磨きをかけて、完璧な英雄へと育て上げられたのです。しかし、トロイア戦争に参加すれば、不朽の栄誉を得る代わりに必ず戦死するという運命が定まっていました。息子を若死にさせたくないと思ったテティスは、スキュロス島のリュコメデス王に預けてアキレウスを女装させて王女の一人として匿ってもらうことにしました。

オデュッセウスはスキュロス島に行き、贈り物として美しい布と武器を持参します。他の王女たちが布を手に取ったのに対して、女装したアキレウスだけが武器を手にしたため、正体がバレてしまいます。オデュッセウスの作戦が功を奏し、アキレウスは自ら志願してトロイア戦争に行くことになります。テティスは戦士として誇り高く生きたいと願うアキレウスを母として黙って見送るしかありませんでした。

アキレウスはその後、トロイアの王子・ヘクトルとトロイロスを倒すなど大活躍しますが、ヘクトルの弟・パリスが、アポロンからアキレウスの弱点が踵であることを聞き、アキレウスの踵に矢を放ち、見事に命中。アキレウスは最期を遂げることとなったのです。

※次回は高蔵遺跡伝説について特集します。
お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K
■ イラスト／Rei
■ 取材・文／Icarus